慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	主体・他者・残余 : バトラーにおけるメランコリーをめぐって
Sub Title	Subject, other, remainder : melancholy in Butler
Author	長野, 慎一(Nagano, Shinichi)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2007
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.12 (2007.) ,p.60- 73
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20070000-0060

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田社会学第 12 号（2007）

主体・他者・残余

バトラーにおけるメランコリーをめぐって

Subject, Other, Remainder: Melancholy in Butler

長野　慎一

1．はじめに

ミシェル・フーコーは、性的主体を、権力関係に先立って存在するものとしてではなく、権力関係の効果として成立すると説明する。それゆえに、性的主体と権力を対立的に捉える精神分析は、批判の対象になる。ジュディス・バトラーは、この批判をうけつぎながらも、精神分析の再読から、フーコーにおいて十分に論じられなかった主体と他者の関係について明らかにしようとする。

本稿の目的は、バトラーのメランコリー論の検討を通して、主体化にともなう排除される他者の構築、そうした他者の主体化の様態を考察することである。まず、なぜバトラーはフーコーから離脱しなければならないのかを確認する（1 節）。次に、この結果うまれるフーコーからの距離は、精神分析を介して、どのような帰結を、主体と他者に関する考察へともたらすのかを論じる（2 節、3 節）。最後に、バトラーとともに、近代の権力の形式に対して批判的な主体性のあり方を示す（5 節）。

2．魂による物質化とその残余

フーコーは、『性の歴史 I』において、近代の権力の形式を、生 - 権力として抽出した。この権力の形式は、解剖 - 政治学（身体の規律＝訓練）と生 - 政治学（種の調整）の二つの軸からなり、生命を管理することを主眼に置く（Foucault 1976=1986: 176-7）。二つの軸の交点にある「具体的な構成＝配置」が、「セクシュアリティの装置」である。この装置は、「人間」が「人間」であるために不可欠な「『前提となる、本源的セックス』という想像上の要素」を生み出すことで、「セックスに対する欲望」そのものを、各人に涵養していく（Foucault 1976=1986: 178, 183-4, 198, 1977=2000: 551）。となると、もはや「人間」という「主体」は、権力による抑圧以前に存在する、己のセックスに関する真理に直接的にアクセスすることは不可能になる。むしろ、その真理を知ることそのものが、「セクシュアリティの装置」の要請なのであり、この手続きの結果、生まれる真理が、セックスをもつ主体の権能と認識能力を、いわば客観的に規定していくことになる（Foucault 1976=1986: 196-8）。

フーコーにおいては、権力と性的主体の関係は本質的に外在的なものではなく、内在的なものなのである。権力は性的主体を産出するのであり、禁止するのではない。かりに、法として表象され

る権力、つまり、禁止という形式に基づく権力が存在するにしても、それは生 - 権力の一部の要素なのである（Foucault 1976=1986: 37）。権力と性的主体の間に内在的関係を想定するこの視座は、法以前に主体を想定する古典的なリベラリズムを批判するバトラーにも取り込まれている。『ジェンダー・トラブル』での分析によれば、法（禁止）という形式の権力は、自己に対して時間的・論理的に「まえに」「存在する」領域を措定することで権力関係の「外部」を生み出す、権力関係内部の機能なのである。そして、法は、性的主体そのものの産出に関与しながらも、それとは対抗的に存在すると自己定義することで、「セックス」、「性別化された身体」、それに基づく主体を、権力関係に先立つものとして位置づける（Butler 1990=1999: 21, 29）。

むろん、法の産出機能を強調するだけであれば、フーコーの生 - 権力分析をこえるものではない。しかし、バトラーは、法の産出機能がもたらす不均衡な効果、つまり、理解されうる主体と理解されえない主体を産出する様態を分析することで、フーコーの枠組みの刷新をはかるのである。

主体として理解されるための条件が、己の本性が「セックス」という記号を基に規定されていることであるとするならば、同様に同じ規定はどのようにして主体として理解されえない条件をも構成しているのか。つまり、「セックス」は、ある生の主体性を理解しえないものに仕立てる原理、認識能力や権能において劣っていると考えさせる原理として、どのように機能するのか。バトラーは、性的主体をめぐる言説が理解可能性の領域の一貫性を維持するために禁止し排除しなければならない領域、すなわち構成的外部に焦点をあてる。構成的外部と主体形成の関係に関するバトラーの考察は、フーコーと精神分析の両者にまたがる形で行われるが、フーコーにおいては構成的外部が十分に検討されていないと彼女は言う。彼女の批判的立場が明確になるのは、フーコーの「魂 l'âme [1]」の位置づけをめぐる考察においてである。

「魂」とは、「政治学の成果にして道具」であり、「身体」を規律＝訓練する権力が働きかける係留点として言語化される内的核として、フーコーが『監獄の誕生』で分析したものである。それは、「霊魂」「主観」「人格」「意識」などの概念を充当され、指示対象として存在するものとして主体に措定される（Foucault 1975=1977: 33-4）。フーコーにおいては、心的なものも、身体の規律＝訓練による主体形成を担う装置として位置づけられるのである。そして、バトラーは、フーコーが分析した「魂」を、「身体」の「物質化」を担う「歴史的に特殊な想像上の理念」であるとパラフレーズする（Butler 1993: 33）。「物質化」とは、「境界、固定性、物質とわれわれが呼ぶ表面、といった効果を産出するために継続的に安定化を行う」「過程」であり、言説の作用によって生じる（Butler 1993: 9, 10-2）。しかしながら、バトラーが言うには、言説と物質についてのフーコーの分析では「根源的に物質化に抵抗するか、もしくは、根源的に脱物質化されたままである、根源的な理解不可能性の領域」を説明できない（Butler 1993: 35）。「魂」が「理念」として機能し主体を産出する際に、「人間」として存続する主体の要件である「物質」としては言説化されぬ領域が同時に産出される様態を分析するべきであるとバトラーは考えるのだ。

『問題＝物質となる身体』[2]では、「魂」によって主体の要件としては物質化されぬ領域が分析されている。バトラーによれば、リュス・イリガライは、物質化されぬ領域を構成するものとして、

「女性的なもの」を考察している。男根ロゴス中心主義的な言説は、「魂」／「身体」の二項対立の各項に、「男性」／「女性」を配置する。しかしながら、「身体」の位置にある「女性」という「セックス」は、実は「身体」ですらない。この二項対立において、「女性」という「身体」は、「男性」という「魂」の同一性（アイデンティティ）を反射するために配置されているに過ぎないからだ。それゆえ、女性というセックスは、その主体性、物質性もろとも、そもそも女性差別的言説においては抹消されているのである（Butler 1993: 36-49）。

バトラー自身は、イリガライが「女性的なもの」を「魂」にとっての唯一の他者として固定する傾向に対しては批判的であり、それ以外のものがこの他者の座を占める可能性を認めている。ただし、現に女性的なものが抹消される傾向にある点、そして、依存する他者の抹消によって「魂」が同一性を獲得・維持していることをイリガライが明らかにする点で、彼女の分析の有効性を認めるのだ。

留保つきながらもイリガライに従うバトラーは、次のように言う。他者たる「身体」（その代表の１つが「女性的なもの」）を抹消することを代償に、理解可能な「身体」として物質化される領域が、「魂」としての男性の主体性を支えている、そして、結局のところ「魂」として同一性を保持しうる主体は「身体」をも独占していると。しかし、他方で、『権力の心的生』では、「魂」は、「身体の消失という転倒した関係において条件づけられ」ることで「出現」し、「主体」として行為するとも彼女は言う（Butler 1997a: 92）。やはり、「魂」は「身体」であってはならないのだ。それゆえ、「魂」と「身体」に関するバトラーの見解は、矛盾しているように映る。しかしながら、バトラーが物質化される領域をある種の主体に認められる特権として分析している点を考えれば、その考察においては、「物質」という概念について、「魂」の様態に干渉を及ぼさずかつその成立の要件となる「物質」と、「魂」の価値を貶めその成立の要件とならない「物質」の間で区別がなされていると判断してよい。そして、近代においてペニスを備えヴァギナを貫く身体が、正当な主体であるための要件であったことを考えれば、この矛盾は近代の矛盾を反映したものであると言えるだろう。むしろ、バトラーの主張の要点は、「身体ではない男性の身体の形象」（Butler 1993: 49）を我が物とすることによって、異性愛の「男性」は「物質」の干渉をよそに「魂」として行為することが可能になっているということだ。

「魂」としての特権を主体が得るためには、「魂」を基礎づけながらも「魂」によって制御可能な安定的境界を備える「物質」であることが要請される。他方で、「魂」の価値を貶める「物質」、バトラーの言い方を用いれば「根源的に物質化に抵抗するか、もしくは、根源的に脱物質化されたままである、根源的な理解不可能性の領域」（Butler 1993: 35）は、「魂」が「魂」であるためには、同一化や欲望のあり方について、禁止によって排除されていなければならない。この禁止されるべき物質としてバトラーが想定しているものは、彼女が依拠する性の政治の文脈 [3]、そして、イリガライに対する両義的立場を考慮すれば、「女性」のほか、レズビアン、とりわけ、男性的なものとの幻想において同一性や欲望を追求するレズビアンのセクシュアリティや、また、「男性」であっても異性愛規範にそぐわないセクシュアリティなどが考えられる。バトラーの議論に従えば、このよう

な禁止されるべき物質のあり方を身にまとう限り、その主体は「魂」として認可されないのである。

フーコーは、「セックスに対する欲望」の涵養によって権力は主体を産出すると論じた（Foucault 1976=1986: 198）。バトラーが明らかにするのは、この権力がいまだ禁止に依拠することで理解不可能な領域を構成的外部として産出すること、理解可能な領域から取り残される残余の領域を産出すること、そして、それゆえ、主体の様態は一律ではなく、理解可能な領域において行為者としての性格を得る主体と、あくまで取り残されたもの、つまり残余として、消失する身体の領域に漂う主体が存在することである。

しかし、さらに重要な点は、実は、理解可能な主体と理解不可能な主体が相互に入れ子関係になっていることだ。バトラーは、「身体ではない男性の身体の形象」（Butler 1993: 49）は、身体であるセックスの形象（身体である女性の身体の形象、身体である同性愛の男性の身体の形象）を、自己像としては否定することで、内的に保存することによって、成立すると考えているからだ。バトラーが言うには、他者の形象は、「身体的残余」として「構成的喪失」という形で「主体」の中に存続し続けている（Butler 1997a: 92）。彼女のジークムント・フロイトに関する一連の論考は、他者化された身体的残余の内的保存を論じるものである。次節では、フロイトのメランコリー論を再解釈するバトラーの議論から、主体形成と他者の内的関係を考察する。

3．メランコリーと他者の保存

「悲哀とメランコリー」で、フロイトは、「メランコリー」という概念を定式化した。そのきっかけになったのは、ある女性に見られる激しい自己叱責が、実は、愛する夫に向けられた非難の再演であるという発見である。フロイトは、喪失された愛の対象が、その喪失を忘却することと引き換えに、叱責が向かうべき心的な対象として自我の座を占め、その結果、本人にとっては理由もわからぬまま、自尊心が低下する状態をつきとめ、これをメランコリーと呼んだのである（Freud [1917] 1946=1970: 138-41）。メランコリーは、叱責される対象としての自我と叱責する審級としての超 - 自我（良心）からなる「精神＝心 the psyche [4]」のトポスを形成する（Freud [1917] 1946=1970: 140-8）。「自我とエス」は、「エス」という概念を導入することで、対象の喪失に伴う自我の明瞭な境界の成立を説明する [5]。無意識的なエスは、超 - 自我による叱責を介して、失われた対象を自我という場に復活させ、ひそかに愛を継続するのである（Freud 1923=1996: 227-9）。対して、バトラーは、社会的なものから根源的に逃れる心的なものの実体化を否定しているため、禁止を引用するパフォーマティヴィティが、精神＝心という空間を形成すると考える（Butler 1997a: 198）。バトラーにおいては、エスの出先機関である自我がメランコリーに直面することで、対象化される自我と超 - 自我の分離が成立するのではなく、メランコリーの機制がはじめにあり、その結果として、法を代表する審級としての超 - 自我と、審問される審級としての自我が成立すると、フロイトを修正する。

さらに、フロイトが、同じ論文で、息子の父への愛の断念から、息子の父への同一化を図式化するとき [6]、バトラーは、これを、同性への愛の断念に基づく同性への同一化を描くものとして受容

し、これに従って考察を進める（Butler 1997a: 136）。フロイトにおいては、父への愛を禁止する法の守護者としての超 - 自我は、父に照らして遜色のない自我であるかどうかを審問することで、罪の意識を息子の内部に構築していく（Freud 1923=1996: 236-7）。これを基に、バトラーは、同性への愛を禁止する法の守護者としての超 - 自我を介して、同性の理想性に照らして遜色ないか否かが審問されることで、異性愛者の自我が成立していくあり様を論じる。メランコリーの状態にある異性愛者にとって、同性は愛の対象としては失われたものであり、その喪失は「語りえぬもの」として忘却されていなければならないのである（Butler 1990=1999: 136, cf. 1997a: 140-3）。

フロイトのメランコリー概念は、喪失された欲望（対象）が自己への叱責（同一性）という形態へと変換される様態を描くものだが、バトラーにとっても、この様態は、欲望の断念を通して対象の性質を帯びる、自己監視的な心的空間が形成されていく様を示すものなのである。そして、このメランコリーが、バトラーにとってさらに重要である理由は、これが単に心的なものであるのみならず、「体内化」という「身体」のある種の本質化を前提にするからだ。メランコリーにおいては、言語化不可能な愛の断念が自我の性質へと変換される。この変換は、身体としての自我の成立を不可避に伴う。バトラーは、欲望の不可能性を代償に、同一性を可能にする身体の要件が、幻想によって作られると考えるが、精神分析家にならい、この幻想の作用を体内化と言う。彼女によれば、体内化はあくまで幻想に属するものである以上、それは身体そのものに由来するのではなく、「意味が書き込まれる、表面としての身体のうえ」において生じる（Butler 1990=1999: 129-30）。

「意味が書き込まれる、表面としての身体」という着想は、フロイトが「身体自我」として言及した、幻想的にイメージされた身体的形象に基づく自我のあり方に由来する。フロイトは、「自分の身体、とくにその表面」は知覚が発生する場所であり、その知覚によって生じる「自己の身体についての表象」から自我の性質が形成されると論じた。自我とは「身体的な自我」であり、「単に表面的なものではなく、それ自体が表面の投影である」と言う（Freud 1923=1996: 223-4）。フロイト自身は「表面」という言葉を、身体の深浅のみならず、心＝精神の深浅を示すために用いているが（Freud 1923=1996: 213）、バトラーが、エスと自我という対比、また身体そのものへの直接的アクセスを否定し、それらの実体化が言説の作用によると論じる以上、彼女がいう「表面としての身体」は、言説が作用する場における幻想上の身体であり、フロイトが示唆する、表象において析出する身体ということになるだろう。実際、バトラーは次のように言う。

> 事実、ともかく欲望するためには、想像上のジェンダー規則に照らして欲望をもちうる身体要件を満たすように変えられた身体自我を信じることが必要となる。このように欲望が想像上のものだということは、欲望がはたらく手段であり場所である身体を、つねに越えているものなのだ。（Butler 1990=1999: 134-5）

つまり、想像上のジェンダー規則が先にあり、そのうちで身体自我は生じるのだ。

異性愛のメランコリーにおいては、己の身体を、同性への欲望が根本的に不可能である身体とし

て幻想化することで（つまり、体内化することで）、異性愛を合理化する「身体の事実性」が立ち現れる。異性愛の身体要件を満たすように変えられた身体自我は、己の欲望を正しい官能の発露の原因となる特定の身体部位に位置づけるのである（Butler 1990=1999: 131）。ここでは、「性別化された身体の表面〔「表面としての身体」と同義〕は、自然な（自然化された）アイデンティティや欲望を指し示すための不可避な記号としてたち現われてくる」（Butler 1990=1999: 135）。

しかし、重要な点は、これがあくまで禁止からなる規則の結果であるということだ。「表面としての身体」に基づく自我（つまり身体自我）は、欲望を可能にさせるものだが、他方で欲望を不可能にさせることに依拠している。「想像上のジェンダー規則」が定める「欲望をもちうる身体要件」は、体内化の帰結として成立する限り、「脱物質化されたままである、根源的な理解不可能性の領域」（Butler 1993: 35）である残余（ジェンダー規則が禁止する欲望を発露する身体）への同一化を禁止し続けることに依存しなければ、自己が指示すべき身体の領域の「物質化」をはかることが不可能であるからだ。異性愛者の「身体の表面」の自然化は、反面において、異性愛化された身体部位を、同性への欲望を遂行する器官として認知することを禁止し続けることを要請する。それゆえ、「セックス」との間の一貫した関連をもつ異性愛の主体を成立させる身体自我は、その成立のために、自己の内部に、禁止の対象として、同性を欲望する身体の形象を保持し続けなければならない。メランコリックな異性愛者は、自己の身体の境界を否定的に枠づける、棄却すべき他者（同性への欲望を公言する主体）を、実現されなかったもうひとりの自分として残存させ続けなければならないのだ。

魂に関するフーコーの分析は、主体の境界を否定的に描きだす棄却されるべき他者を対象にしないが、メランコリーと身体自我に関するフロイトの分析は、主体が、喪失すべき他者（断念されるべきある欲望、結果、断念されるべきその欲望の主体）の内的保存に依拠していることを示唆する。フロイト自身の分析は異性愛者のメランコリーをめぐるものである。それでは、同性愛の主体の成立はフロイトに従えばどのように説明できるのだろうか。とりわけ、その出現もまたメランコリーの機制が推進するものであるとすればどのようなものになるだろうか。この点について、バトラーは「同性愛者」の成立、しかもメランコリックな「同性愛者」の成立の可能性をも原理的にフロイトは説明すると言う（Butler 1990=1999: 133, 1997a: 149）。しかしながら、バトラーは、最終的に同性愛の喪失を否定し、同性愛の正当性を自己監視的に否認し続けることで成立するフロイトの理論そのものが、自己の言説の一貫性の維持をメランコリーの機制に依存していると位置づけているように思われる。

欲望と同一性の排他的な関係を想定するフロイトに従えば、男性へ欲望を向ける主体にとっては、同一化の対象は女性、女性へ欲望を向ける主体にとっては、同一化の対象は男性である。しかし、実は、この同性愛の男性の女性化、同性愛の女性の男性化は、規範的なジェンダーを代償にして成立する同性への欲望の成立を意味するものではない。バトラーによれば、フロイトの同性愛の観念は、あくまで異性愛を屈折した形で凝縮したものなのである。フロイトにおいては、男性を対象とする同性愛は、男性の中の異性愛化されている女性気質の、女性を対象とする同性愛は、女性の中

の異性愛化されている男性気質の結果なのである。このため、彼のエディプス・コンプレクスの理論は、「異性愛気質」のみを認可する一次的な「同性愛タブー」に依拠しているのである（Butler 1990=1999: 119, 124, 126）。バトラーは、異性愛者のメランコリーと同性愛者のメランコリーは、異性愛を規範とする言説においては、非対称的に生じると言うが（Butler 1990=1999: 133）、この非対称性は、フロイトの理論自体に影を落とす同性愛の禁止にも反映されていると言えるのだ。

以上のように、フロイトは、「性別化された身体」の異性愛主義的な固定化が、棄却すべき他者の内的保存に依存していることを明らかにするが、他者がいかにこの固定化に抵抗するか、また、いかにフロイト自身が再演してみせた異性愛の法に変容をもたらすかを十分に論じない。しかし、もしも自我を構成する、身体についての幻想が、法の物象化作用によるものであるならば、原理的にはいかなる幻想も変容の可能性に開かれている。ジャック・ラカンに関するバトラーの考察は、「多層的で異種共存的な同一化」（Butler 1990=1999: 129）が、セックスに関する言説の物象化にいかに変容をもたらすかを、ラカン自身の理論を脱構築することで示すものである。次節では、精神分析が固定的なものと見なした法の変容の可能性を、バトラーの「ファルス」に関する考察の中にみていく。

4．他者による法の置換

異性愛主義を批判するバトラーの戦略は、純粋な同性愛の領域、純粋な同性愛の主体の領域の理論化ではない。かわりに問われるのは、法に条件づけられながら出現する同性愛が、自己を否定する法を元手にいかに主体化を果たしうるか、またその主体化は法にいかなる効果をもたらしうるかである。そこでバトラーは、ラカンの「鏡像段階」論から一般化された概念である「想像界」を、フロイトの「身体自我」の練り直しと位置づけ、法の作用を置換していく「想像界」の可能性を探求する。

「鏡像段階」とは、「寸断された身体」の感覚しかもたない未熟な幼児が、鏡に映った自己の身体イメージから己の全体像を先取りしていく過程に対してラカンが与えた名称である。この「鏡像的配置」が自我という「心的現実」を成立させる。そして自我は、「鏡」という、個人に還元しえない「虚像の系列」に属する身体のイメージへの同一化において成立することから、主体は根本的に自己から疎外されている（Lacan [1949] 1966=1972: 126-7）。バトラーはこれを受け次のように言う。すなわち、ラカンにおいては、「身体の形態 the morphology of the body」は「心的に投資された投影、つまり、制御の全体性でありかつ根源としての身体の理想化ないし『虚構』」であると概念化される。ここにいたり、「身体自我」は、身体そのものから、決定的に「投影と誤認のダイナミズム」の中に置かれる（Butler 1993: 73）。

しかし、ラカンにおいては、心的な虚構としての「身体の形態」は法に決定される運命にある。幼児は、言語の領域へと参入することで、「鏡像的わたし」から「社会的わたし」へと変容する（Lacan [1949] 1966=1972: 130）。「ファルスの意味作用」において彼が論じるには、「去勢コンプレクス」は、性的主体として社会的に認可されるためには、全ての者に履行が求められる法である。このコ

ンプレクスの遂行を規定するのが、彼が「ファルス」と呼んだものである。これは、性器を象徴化するが性器には還元しえず、また、想像的なものに効果を及ぼすが想像的なものには還元しえない特権的なシニフィアン（記号表現）である（Lacan [1958] 1966=1981: 147, 153）。

むろん、バトラーが「鏡像段階」と「去勢コンプレクス」の考察に向かうのは、ラカンとは別様の発達段階を説明するためではない。異性愛主義的・女性差別的な言説において機能する禁止と、「身体の形態」のうちに成立する主体との関係を再考するため、言い換えれば、異性愛の男性という「ひとつであるセックス the sex which is one」（Butler 1993: 59）のみを「ファルス」の名のもとに理解可能な主体として法制化する言語、つまり「象徴界」と、「鏡像的配置」として示される心的枠組みである「想像界」との関係を再考するためなのだ。それゆえ、その考察の対象は「ファルス」（シニフィアン）と「ペニス」（指示対象）との関係である。

バトラーは、「ファルス」は「ペニス」ではない（つまり、「ペニス」の特権化とは本来無関係である）と述べつつ、「ペニス」へ固執するラカンを批判する。

> ファルスが特権的な方法において、象徴化と意味づけを行うためにペニスを否定しなければならないのであれば、ファルスは単なる同一性によってではなく、決定的な否定によってペニスに縛りつけられる。ファルスがペニスでない限りにおいて、ファルスが意味づけを行うのであれば、そして、ペニスがファルスがそうであるべきではない身体部位として資格を付与されるのであれば、ファルスは象徴化をおこなうために根源的にペニスに依存する。(Butler 1993: 84)

去勢コンプレクスを合理化するシニフィアンは、解剖学上の「ペニス」との間に結ぶ否定的関係の頑なさゆえに、常に「ペニス」を「特権的指示対象」として出現させ、この「ペニス」という器官を軸に、「寸断された身体」から解放され全体性を獲得している想像界に依存しなければならないのである（Butler 1993: 81-4）。したがって、「ペニス」との同一性の関係を否定する「ファルス」の特権的地位は、「想像的なものであり、ひとつの効果であるというそれ自身の地位を否定する想像的な効果」を通して獲得されるものであると考えるべきなのだ（Butler 1993: 79）。

そこで、バトラーは、「レズビアン・ファルス」という、女性同士の欲望において意味づけなおされるファルスの可能性について考察し、ファルスと男性的想像界の結合を解除しようとする。ラカンにおいては、「男性」／「女性」は「ファルス」「をもつ」位置（去勢不安によって生じる、社会的わたし）／「ファルス」「である」位置（ペニス羨望によって生じ、ときに去勢の脅威を行使する、社会的わたし）に排他的に位置づけられる。この配置においては、欲望の主体位置としての「男性」と「男性」の欲望を反映する「女性」の非対称的関係が、異性愛の関係として法制化されている。この法制化に対して、バトラーが掲げる抵抗の戦略は、「ファルスを非特権化し、規範的な異性愛の形式からそれを取り去り、同時に女性の間にそれを再循環させ、再特権化する行為」において、それ（ファルス）を再配置し、慣例的な意味作用を破壊することである（Butler 1993: 88）。

バトラーによれば、「ペニス」以外の他の「身体部位」を象徴化する「ファルス」の能力、つまり、

置換の能力に基づく「レズビアン・ファルス」は、「『をもつ』と『である』の秩序を横断し」、「女性」に帰属させられる「去勢の脅威」を行使し、同時に「男性」を構築する「去勢不安」にも苛まれることになる。この結果、「去勢不安とペニス羨望の相互排他的な軌道は疑問に付される」ことになり、いまや、ペニスをもつ男性が「ペニス羨望（ファルス羨望）」をもち、そして、ペニスがないはずの女性が「去勢不安」を抱くのである（Butler 1993: 84-5）。

「ファルス」が他の器官をも象徴化する能力をもつ以上、ファルスはペニスの喪失によって設立されているのであり、ペニスをもつに過ぎない男性は、決してファルス「をもつ」ことはできない。それゆえ「男性は（すでに）去勢されているとともにペニス羨望（より適切にいえばファルス羨望）によって突き動かされるのかもしれない」（Butler 1993: 85）。つまり、「ペニス」において「寸断された身体」から解放されている男性的想像界は、己の自作自演によって物象化に加担した特権的なシニフィアンである「ファルス」の前に跪くのであり、潜在化した女性としての同一化につきまとわれる。

他方で、ファルスの置換の能力を考えれば、ペニスをもたぬ女性が、別の身体部位（むろんペニスでもかまわないが）をファルスの位置に配置することは原理的に許されるのであり、別の器官で意味されたファルスに対して所有を宣言する想像界が成立することは十分に可能である。むろん、バトラーの議論を敷衍すれば、この場合、「ファルス」が、いかなる器官の想像的な物象化に依存するかは非決定的である。ともあれ、やはりファルスに対して疎外されている位置であることは、異性愛化された男性的想像界と同様であり、対抗的な女性的想像界もまたファルス喪失の不安を抱えることになる。それゆえバトラーは、ラカンの図式からいえば矛盾である「ファルス」「をもち」そして「ファルス」の喪失を恐れる「女性」が、去勢不安に突き動かされながら、同性愛の交換において異性愛を暗示しつつ出現し、異性愛の交換においては同性愛を暗示しつつ出現する可能性を指摘するのだ（Butler 1993: 85）。ラカンの図式では、「ファルス」「をもつ」位置につくのは「男性」である。ある意味でバトラーはこの図式を文字通り受け取るのである。その結果、「女性」を愛する「ファルス」「をもつ」「女性」は、「をもつ」位置にある以上「男性」であるのだから異性愛を暗示するはずであり、他方で「男性」を愛する「ファルス」「をもつ」「女性」もまた同じ理由で「男性」であるのだから同性愛を暗示するはずであると彼女は判断するのだ。

また、何よりも、レズビアン・ファルスの導入は、「男性的なもの」から、分離主義的に構築される女性的想像界への批判でもある。なぜならば、女性的想像界の純化は、排除されるべき「全ての男性性の純化」を前提とする。その鏡像的配置は、「男性的なもの」を、「女性的なものを陰影化しうち棄てる不可能な理念」もしくは「特定のレズビアン - フェミニズムが自己定義に際し、反面教師とする家父長的秩序の信用ならぬシニフィアン」として禁止することになる（Butler 1993: 87）。つまり、女性的想像界は、男性化した法とその法に従順な男性的想像界を、自己を境界づける他者として必要とする。他方で、純粋な領域としての女性性の持続が、男性性の排除に依存する限り、この女性性にとっては、「男性的なもの」を自己のうちに取り込んでいるレズビアン・セクシュアリティは否定されなければならない。むろん、女性への愛を否定し、なお、女性的である想像界は、

フロイトが示したメランコリーの図式をこえるものである。しかしながら、女性的である想像界が、規範化に向かうとき、それは新たなメランコリーを生むことになる。女性を愛しかつ男性的である女性が、内的に保存されるべき排除の対象として位置づけられることになるからだ。

さらに、レズビアン・ファルスの考察は、法に対する男性の同性愛の撹乱的効果についても、敷衍可能である（バトラーは、この概念を用いて、直接に同性愛の男性を分析していないが）。同性への欲望を抱く男性は、女性化した男性として、それゆえ、象徴界の権威を追認する「象徴界の失敗」として、ラカンによって位置づけられる（Butler 1993: 96, 111）。しかし、「ファルス」／「ペニス」の関係が、バトラーが述べてきた通りであれば、「ファルス」「である」位置に置かれた「男性」が、かりに「ペニス」に基づかない想像界や、もしくは、「ペニス」の非異性愛化された用途に基づく想像界のもとに、出現するとしても、それは「ファルス」の置換能力がもたらす可能な帰結である。同時に、この「ファルス」自体を、「ペニス」とは別の器官もしくは、非異性愛化された「ペニス」において領有すれば、特権的シニフィアンが「ファルス」である理由もなくなる。となれば、同性愛において、（ラカンにとっては）予期せぬ「ファルス」「をもつ」「男性」の出現も可能であるのだ。

レズビアン・ファルスに関するバトラーの分析は、男性的な女性同性愛者を、同性愛が異性愛に対してその領土を拡張していく際の模範として呈示しているわけではない。この試みは、精神分析理論において、そして、実践の文脈において、しばしば理解不可能なものとして位置づけられる、他者化された男性的レズビアンを例に、言説および主体性の変容の様々な可能性を示そうとするものなのである。こうした分析がもつ可能性とは次の２点にまとめられるだろう。１つは、異性愛化したジェンダーの法そのもののメランコリーのうちに、また、法に認可される法的主体のメランコリーのうちに出現する同性愛というセクシュアリティ、そしてその主体を理解可能性の領域へもたらす点である。もう１つは、同じ「セックス」間の愛が、異なるジェンダー、異性愛的なものを、棄却されるべき亡霊として他者化し、排除してしまうことへの「批判的な距離」（Butler 2004: 111）である。

純粋な同性愛の領域、純粋な性別化された身体の領域のうちに成立する自我は、メランコリーの論理を必要とし、結果として既にある法を、自己を否定的に構成する他者として必要としてしまうのならば、さらに、その法を自己の構成に取り込んでいる主体の格下げに加担してしまうのならば、「ある同一化が他の同一化の犠牲においてのみ常に作動するという排除の論理」をこえて枠づけられた「同一化」が必要になる（Butler 1993: 87）。それゆえに、「多層的で異種共存的な同一化」（Butler 1990=1999: 129）が必要なのであり、残余の領域と自己の境界線を交渉し続ける「想像界」にこそ、法を脱構築していく可能性があるとバトラーは考えているのだ。

５．主体性の倫理的次元

これまで述べてきたように、バトラーに従えば、「魂」（超‐自我、それに従順な身体自我）は、物質化される理解可能な主体の領域を措定することを通して、その領域そのものを構築する。それは、理解可能な領域を産出するにあたり、物質化されぬ理解不可能な領域を、哀悼されぬ残余とし

て、自己のうちに保存する過程、つまりメランコリーの機制に依存している。ファルスとペニスの間の相互的な物象化は、それが物象化であるがゆえに、法と想像界の関係は本質的に変容に開かれている。とりわけ、新たな形でのファルスの領有は、残余の領域と自己の境界線を交渉し続ける主体のあり方を示すものであった。最後に、この残余と自己の境界線を交渉し続ける主体が、フーコーが示した「逆転の言説」に対してもつ位置を明らかにし、その種の主体性がもつ倫理的次元を考察したい。

フーコーは、生 - 権力に対する抵抗もまた、「セックスへの欲望」の告白を強要する「セクシュアリティの装置」に足場を置いていることを示した（Foucault 1976=1986: 183）。その意味において、「セクシュアリティの装置」は、「性別化された身体」の別様のあり方としての「同性愛者」の成立をも用意するものである。管理のために、官能化された同性への欲望を、管理に対抗させるべく逆転させる主体の成立を「セクシュアリティの装置」は可能にする（Foucault 1976=1986: 183）。精神分析が不変と見なす法を対抗的に改変していく身体自我もしくは想像界が成立するとバトラーが考えるのも、逆転の言説の有効性を認めているからである（Butler 1997a: 98-9）。

しかし、彼女がなお精神分析にこだわるのは、主体としての存続が、ある種のナルシズムによるものである点を、それが明らかにするからである。メランコリーにおいて、自己処罰の感情が高まるのであれば、なぜ、禁止への愛着は養われるのか。バトラーは、これはある種のナルシズムゆえであると言う。「禁止」が「いっそう模範的である」のは、「禁止」が「主体が精神病へと溶解してしまうことを防ぐナルシスティックな回路に縛り付けられている」からだ（Butler 1997b: 103）。存在を約束するものが、法への従順さであるがゆえに、法への愛着は、強化されるのだ。しかし、メランコリーの機制に、法への愛が依存する限り、自己監視的・自己処罰的な主体の成立は、法自身の残余を自身の他者として自己のうちに排除しつつ温存しなければならない。

フーコーは、本質主義的なアイデンティティ・ポリティクスに「逆転の言説」が回収される事態を警戒したが、この事態に向けられる批判を支える論理は、バトラーにいたりより明快なものになる。主体の同一性の持続は、他なる可能性を犠牲にして成立するメランコリックなナルシズムによるものであることが明らかにされるからだ。そして、このナルシズムが、近代の主体性の形式であるならば、同一性の一貫性に固執する主体は、それが抵抗の主体であっても、やはり他者の排除をおかす危険がある。法が認可するセックスのリストへの参入のみが目標になれば、「異形な本性」の「種族」（Foucault 1976=1986: 55-6）は、理解可能な主体として行為することが許容されるようになるかもしれないが、その代償に、メランコリックな「魂」に成り下がるのである。結果として、法および法的主体が依存するメランコリーの論理自体は変更されないのである。

そこで、バトラーは、抵抗のあり方として、「存在しないことを選択する意志――批判的な脱主体化」が必要であると言う（Butler 1997b=2000: 99, 引用者一部改訳）。近代の権力とは、セックスに基づく同一性を各人に配分しつつ、実は、「ひとつであるセックス」のみを、真の同一性を備える主体として存在させ、他方で、正当な同一性が認められない他者化される主体をも産出するのである。それゆえ、抵抗の目標は、「ひとつであるセックス」に付与される主体の形式の獲得ではない。残余

との遭遇において、法と主体の同一性の境界が交渉され続けられることが必要なのだ。権力の彼方の無意識ではなく、権力の無意識、この不透明な空間の出現によって、主体としての一貫性が崩壊していく過程に、バトラーは、倫理的な生の条件をみる（Butler 1997a: 104, 182 , 2005: 135-6）。

バトラーが示唆する、対抗的な生が直面する苦境と希望とは、同一性の確立を求め、かつ、己を「語りえぬもの」として構成する言説のうち置かれながら、倫理的選択を迫られている点である。バトラーがその可能性を指摘する異種混淆的なパフォーマティヴィティとは、排除に基づく自己の同一性を回避し法の他者の痕跡を出現させていく実践であるがゆえに、近代のナルシズムを超克する倫理的な次元をもつのである。

6．おわりに

フーコーの権力論・主体論は、主体が依拠すべき知も権力関係から自由ではないことを明らかにする。その上で性的主体と権力の関係の再検討を要請する。バトラーは、これに従いながらも、フーコーが十分には分析しなかった排除の論理を、精神分析を手がかりに明らかにしたのである。とりわけ、排除した他者を自己のうちに秘密裏に存続させるメランコリーの機制に関する精神分析の着想を再考することで、言説の一貫性、そして主体の一貫性が、自ら排除する他者と入れ子関係になっていることを示すのである。結果として、「主体」批判も、フーコーとは異なる色彩を帯びるようになる。

近代の権力が、セックスを我が物としたいという願望を養うだけでなく、禁止すべき他者をも内的に保存させることで、主体の成立に関与するのであれば、差別の構造に対する根本的な抵抗を、純粋な性的主体の新たな確立に基づかせることは、いっそう不適切なものになる。強迫観念的なナルシズムを回避し、法および自己のメランコリーに対峙し、自己の境界の脆弱さを甘受することが、倫理的生の条件であるからだ。バトラーが、異性愛主義や女性差別を変容する政治の必要性を認めながら、「同性愛者」や「女性」という主体の確立よりも、それらの脱構築に力点を置くのは、こうした認識のためなのである。

【註】

1) フーコーの “l'âme” は、田村俶によって、「精神」と訳されているが（Foucault 1975=1977: 34 を参照）、「精神分析」の「精神」を表す “the psyche” と区別するために、本稿では「魂」と訳す。“the psyche” は、その形容詞 “psychic” が「心的」とときに訳されるので、本稿では、“the psyche” は「精神＝心」と記す。

2) *Bodies that Matter* の邦題は、竹村和子に従った(cf. Salih 2002=2005)。

3) バトラーは、『ジェンダー・トラブル』の執筆の動機に、「セックスという理想的な形態学が暗示する規範的な暴力に対抗」すること、「セクシュアリティについての凡庸で学術的な言説が伝える自然な、あるいは、推定上の異性愛に関する広く浸透した思いこみを根絶」することを挙げている（Butler 1999=2000:

75)。セクシュアル・マイノリティに関する彼女の考察は、多岐にわたるが、同性愛についての具体的な言及は、『触発する言葉』の 3 章と 4 章にある。そこでの分析によれば、同性愛をカミングアウトする軍人に関するアメリカ合衆国の言説においては、同性愛の男性については、同一性の表明が即座に欲望の行使に還元される一方で、異性愛の男性は、同性愛の男性が振るう欲望の行使の想定上の被害者として位置づけられている。さらに、同性愛の女性の欲望は、異性愛化されたジェンダー関係を崩さぬように、セクシュアル・ハラスメントの対象としてのみ浮上し、語られることがはじめから困難なものにされている（Butler 1997c=2004: 178, 189, 205)。

4) 1) を参照してほしい。

5)「エス」とは、「自我」の受動性を決定づける「未知の統御できない力」であり、「無意識的なもの」である（Freud 1923=1996: 220)。フロイトは、これを、心＝精神の基礎的な構成に関るものと考える。

6)「悲哀とメランコリー」においては、断念される愛の対象である主体のセックスが、メランコリーの過程を通してその愛を断念した主体のジェンダー・アイデンティティの形成に影響を及ぼすか否かについては、明確に論じられていない。しかし、「自我とエス」においては、この点に焦点が当てられている。ここでは、フロイトは、主に、父と母に対する少年の愛と同一化の関係を図式化している。父への同一化は母への愛と相関し、逆に、母への同一化は父への愛と相関する。そして、1 人の少年の中に、同一化と欲望のこれら 2 つの系列がともに存在していると分析される（Freud 1923=1996: 235-6)。

【文献】

Butler, Judith, 1990, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, Routledge.（＝1999, 竹村和子訳『ジェンダー・トラブル――フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社.）

———, 1999, "Preface(1999)," *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, Routledge, 7-26.（＝2000, 高橋愛訳「『ジェンダー・トラブル』序文（1999)」『現代思想』28 (16): 66-82.）

———, 1993, *Bodies that Matter: On the Discursive Limits of "Sex"*, Routledge.

———, 1997a, *The Psychic Life of Power :Theories in Subjection*, Stanford.

———, 1997b, ""Conscience Doth Make Subjects of Us All" Althusser's Subjection," *The Psychic Life of Power:* Stanford: 83-105.（＝2000, 井川ちとせ訳「良心がわたしたち皆を主体にする――アルチュセールの主体／隷属化」『現代思想』28(14): 84-103.）

———, 1997c, *Excitable Speech: A Politics of the Performative*, Routledge.（＝2004, 竹村和子訳『触発する言葉――言語・権力・行為体』岩波書店.）

———, 2004, *Precarious Life: The Powers of Mourning and Violence*, Verso.

———, 2005, *Giving an Account of Oneself*, New York: Fordham University Press.

Foucault, Michel, 1975, *Surveiller et Punir: Naissance de la Prison*, Gallimard.（＝1977, 田村俶訳『監獄の誕生――監視と処罰』新潮社.）

———, 1976, *Histoire de la sexualité vol.1: La volonté de savoir*, Gallimard.（＝1986, 渡辺守章訳『性の歴史 I――知への意志』新潮社.）

———, 1977, "Le pouvoir, une bête magnique," *Quadernos para el dialogo 238*: 19-25.（=2000, 石田靖夫訳「権力、一匹のすばらしい野獣」『ミシェル・フーコー思考集成VI——セクシュアリテ／真理』筑摩書房，512-32.）

Freud, Sigmund, [1917] 1946, "Trauer und Melancholie," *Gesammelte Werke X: Werke aus den Jahren 1913-1917*, S. Fischer Veralag, 427-46.（=1970，井村恒郎訳「悲哀とメランコリー」『フロイト著作集第6巻——自我論・不安本能論』人文書院，137-49.）

———, 1923, *Das Ich Und das Es*, Internationaler Psychoanalytischer Verlag.（=1996，中山元訳「自我とエス」『S.フロイト自我論集』ちくま学芸文庫，201-72.）

Lacan, Jacque, [1949] 1966, "Le stade miroir comme formateur de la fonction du Je," *Écrits*, Seuil,93-100.（=1972，宮本忠雄訳「〈わたし〉の機能を形成するものとしての鏡像段階」『エクリ（I）』弘文堂，123-34.）

———, [1958] 1966, "Die Bedeutung des Pallus," *Écrits*, Seuil, 689-96.（=1981，佐々木孝次訳「ファルスの意味作用」『エクリIII』弘文堂，145-62.）

Salih, Sala, 2002, *Judith Butler*, Robert Eaglestone.（=2005，竹村和子訳『ジュディス・バトラー』青土社.）

（ながの　しんいち　慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程）